

万葉の歌

3

人と風土

中西進企画

山内英正著



大和東部

保育社

人と風土

中西進企画

甲陽学院高等学校教諭

山内英正著

万葉の歌

3

大和東部

保育社

万葉の歌—人と風土—③大和東部

昭和62年 2月20日 印刷 定価 1,400円
昭和62年 2月28日 発行

著 者 山 内 英 正
発 行 者 今 井 龍 雄
発 行 所 株式会社 保 育 社

〒540 大阪市東区上町 1-17-13

電話 06-762-1731 (代)

振替口座 大阪 6-12346

〒170 東京都豊島区南大塚1-1-2

電話 03-944-3581 (代)

印刷/セブン印刷株式会社

用紙/日本加工製紙株式会社

王子製紙株式会社

© 1987 山内英正

落丁本・乱丁本はお取り
替えいたします

ISBN4-586-70003-3 C0392 ¥1400E

PRINTED IN JAPAN

(NDC 910.8)

“古代”を歩く

大和国中から眺めた三輪山は、円錐形のなだらかな稜線を描き、男神というより女神の姿を思わせる。南西麓の金屋から天理・奈良へと続く山の辺の道を、わたしがはじめて歩いたのは、もう二十年ほど前のことだ。当時、平等寺川の溪谷は昼なお暗く、玄寶庵に通じる道の辺には、猪除けの電流線が無造作に放置されていた。

あるとき、恩師の仕事の手伝いで、三輪山頂の磐座へ登った。入山証の襷を掛け、許可を得てから写真を数枚撮った。ところが現像してみると、三輪山中でのネガはすべて真っ黒だった。大物主の神の怒りに、わたしは愕然とした。

山の辺の道が変貌するのは、東海自然歩道の構想が出されてからである。自然歩道の複線部の一つが、鈴鹿から南に別れ、笠取山・青山高原を経て、初瀬から山の辺の道を迂回する。折からの飛鳥ブームとともに、この構想は高度経済成長に疲れた人々の心を捉えた。道幅は拡げられ、春秋には、若い男女のざわめきが三輪の檜原にこだまするようになった。大型観光バスは新道を駆け抜け、初瀬谷にも新興住宅が押し寄

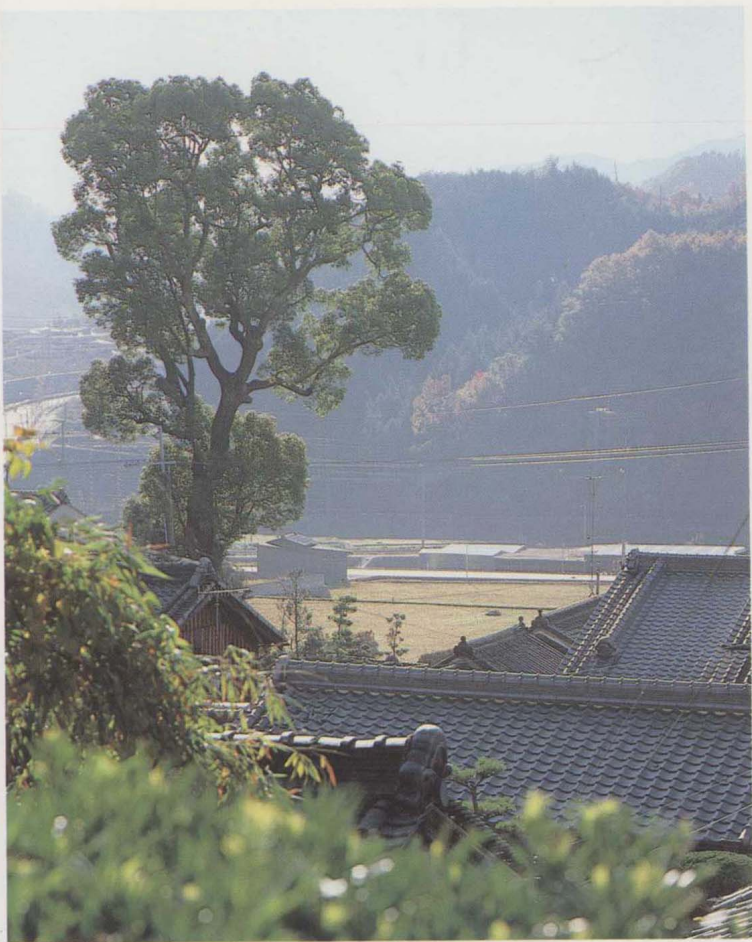
せてきた。「惜しき山の 荒れまく惜しも」の感慨は、万葉人だけのものではない。

今日、万葉の息吹は、むしろ磐余や都祁に移った感さえする。飛鳥の喧噪をよそに、香久山東方の池之内は、ひっそりと静まりかえっている。観光自転車の大群も、ここまではやってこない。

都祁の国は万葉というより、むしろ古代史の宝庫である。激動の時代を彷徨する大宮人は、都祁山道を伊勢へと向かった。

泊瀬朝倉宮や泊瀬斎宮推定遺跡、夏見廃寺の発掘、さらに稻荷山古墳出土の鉄剣銘や、板蓋宮伝承地付近出土の木簡の削り屑文字は、古代史研究に波紋を投げかけた。雄略天皇・大伯皇女・大津皇子などが、歴史と文学の臚げのなかから、現代人の眼前に鮮やかな姿をあらわした。実証主義はしばしばロマンを毀すかもしれないが、實在のなかに、かえって新たなロマンが生み出されることもある。

宇陀の安騎野の黎明に人麻呂を思い、壬申の乱の道を歩くとき、また、大伯皇女を偲んで斎王群行の道を歩くとき、万葉人の実相はより鮮明に、わたしたちの心に甦ってくるのだ。



朝倉宮址か(桜井市 脇本遺跡)

籠^こもよ

み籠^こ持ち

ふくしもよ

みぶくし持ち

この岡^{をか}に

菜摘^{なつ}ます児^こ……

雄略^{りゅうりやく}天皇

(卷一一)



うまさけを

三輪^{みわ}の祝^{はふり}か

斎^{いは}ふ杉^{すぎ}

手^て触^ふれし罪^{つみ}か

君^{きみ}に逢^あひかたき

丹波^{たんば}大女^{はおほめ}娘^め子^{をとめ}

(卷四—七二二)



大神神社



山の辺の道より大和三山を望む

香具山は かぐやま

畝傍ををしと うねび

耳梨と みみなし

相争ひき あひあらそ

神代より かみよ

かくにあるらし

古も いにしへ

然にあれこそ しか

うつせみも

妻を

争ふらしき あらそ

中大兄皇子 なかのおほえのみこ

(巻一一三)

三輪山を 然も隠すか 雲だにも 心あらなも 隠さふべしや

額田王（たのおほきみ）（卷二―一八）

三輪山の朝日



巻向まきむくの

穴師あなしの山に

雲居みつつ

雨は降れども

濡ぬれつつそ来こし



巻向山

巻向まきむくの

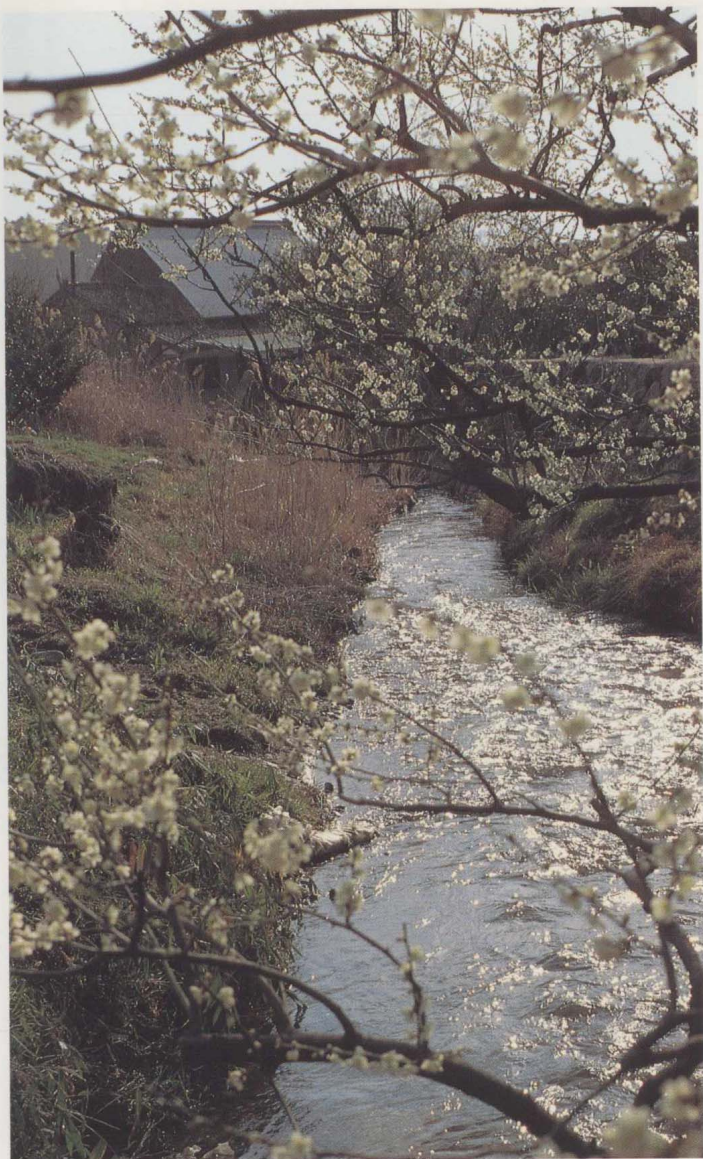
痛足あなしの川かはゆ

行く水の

絶たゆることなく

またかへり見む

柿本人麻呂歌集（巻七一・二〇〇）



穴師川（巻向川）



磐余から二上山を望む

うつそみの

人なる我^{われ}や

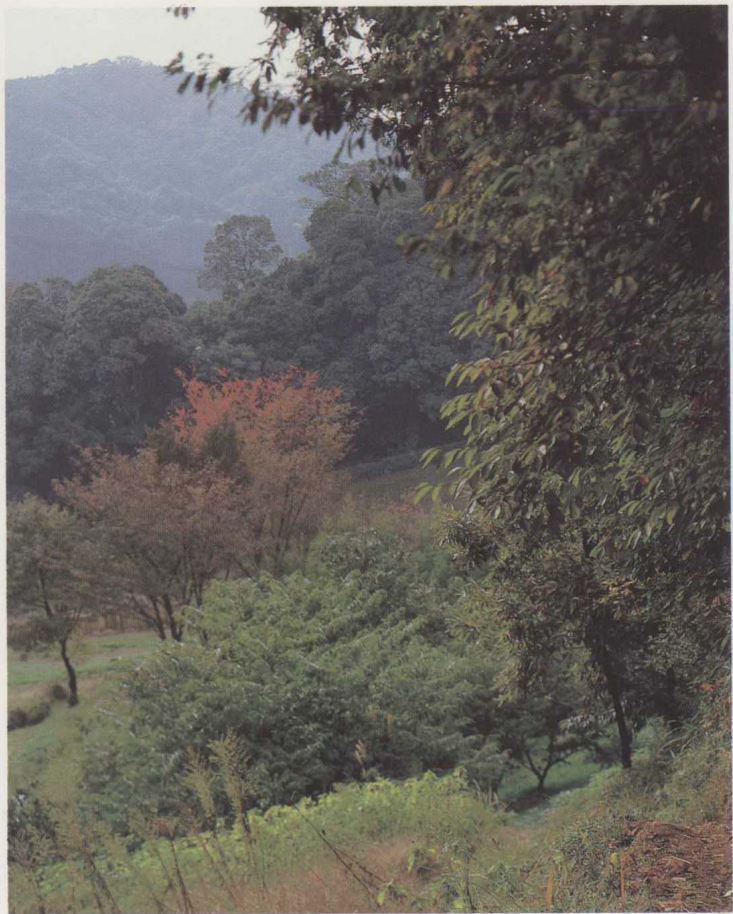
明日^{あす}よりは

二上山^{ふたがみやま}を

弟^{いろせ}と我^あが見む

大伯^{おほくひめ}皇女^{みこ}

(巻二一六五)



忍坂 鏡王女墓付近

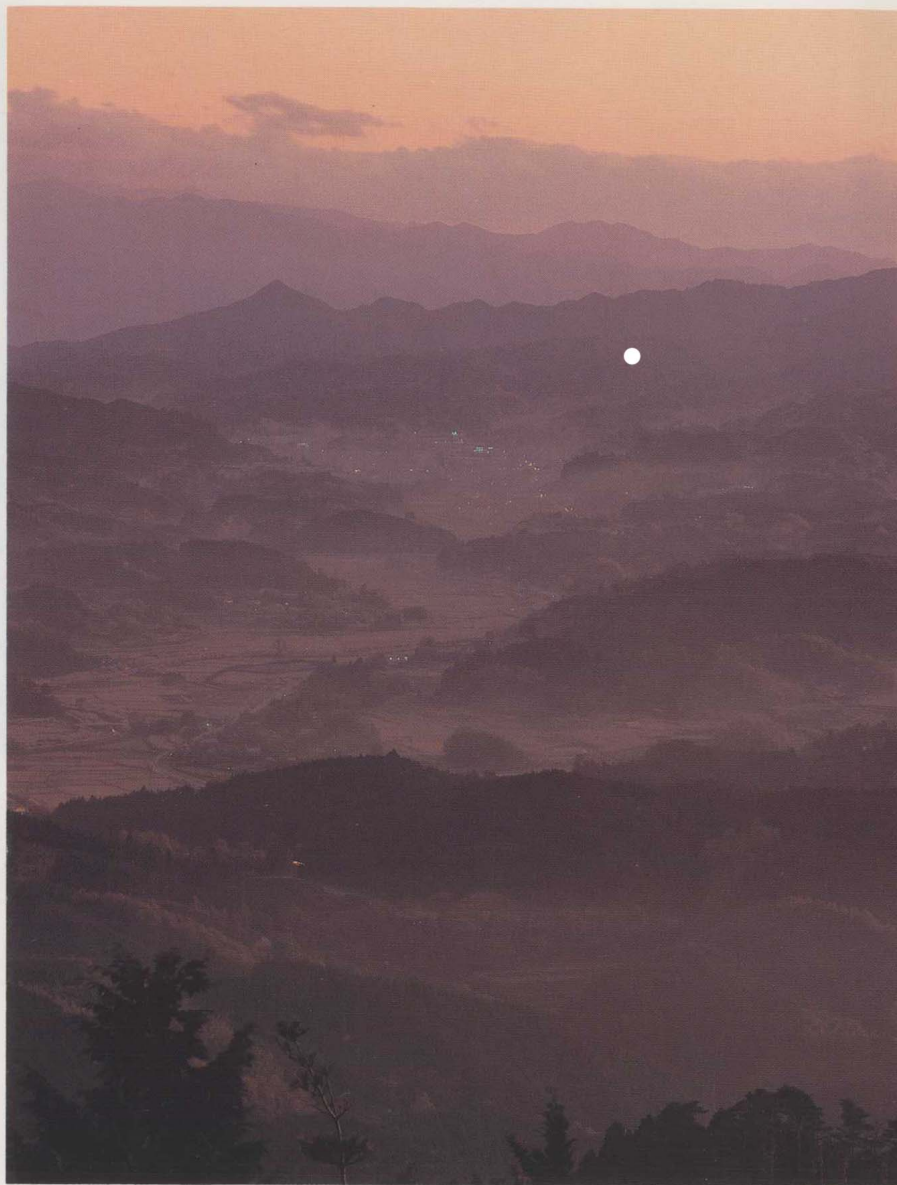
秋山の
木の下こした隠り
行く水の
我こそ益まさめ
思ほすよりは
鏡王女
かがみのおはきみ
(卷二一九二)



……夕^{ゆふ}さり来^くれば
み雪降る
安^あ騎^きの大野に
はたすすき
小^し竹^のを
押しなべ……

柿本人麻呂（卷一―四五）

阿騎野遠望





吉 隠

降る雪は

あはにな降りそ

吉隠の

猪養みかひの岡をかの

寒からまくに

穂積ほづみのみこ皇子

(卷二二〇三)